



1935 (昭和10)年9月1日

『家の光』都市版創刊号出る



監修 **堀越芳昭**
山梨学院大学 元教授

1935 (昭和10)年の『家の光』7月号は遂に発行部数が100万部を突破した。当時の編集部長有元英夫は「百萬部発行の喜びを迎へて」という記事を載せ、そこで有元は「都市方面への普及」について言及した。今回は都市版の展開について見ていく。

■ 『家の光』都市版の発行

「百萬部発行の喜びを迎へて」のなかで、有元は「今後都市方面の普及が活況を呈するやうになれば、實に家の光普及の前途は洋々たるものがある」と都市版について言及した。この背景には、1934 (昭和9)年に開催された「第十二回全国市街地信用組合協議会」で、姫路信用組合から「都市版発行」についての要望書が中央会に提出されたことがあった。中央会としても無視できず、都市版の係を設け、1年間の準備期間をおいて発行することにし、1935 (昭和10)年9月号を都市版創刊号として世に出した。

都市版創刊号の特徴は、『家の光』本誌と比較して、本誌に11ページ程度の農業記事があったのに対し都市版にはこれがなく、代わりに「家庭園芸の手引き」という趣味的な園芸記事を4ページほど扱っている。家庭記事は別建てとし、都市版では若妻向きといったやや都会的なものを載せている。座談会の企画でも都

市版では「都会の家庭の欠陥」といった、わざわざ都会を正面に打ち出した内容のものを扱っている。さらに、都市版ではとくに読み物を重視し、小説は本誌にあるもののほかに、さらに1本掲載している。建てページ262ページで、本誌と遜色無かったことから都市版発行に注力していたことがうかがえる。発行部数は5万4000部であった。

■ 昭和を代表する挿絵画家 岩田専太郎による表紙

都市版について、注目されるべきは表紙を岩田専太郎画伯にお願いしたことである。岩田画伯は、この後に数多くの雑誌・書籍の表紙で美人画を発表し、後に「昭和の挿絵の第一人者」と評価されるが、創刊号の表紙も子供二人に囲まれた美人の母親を描いている。その構図、母親の美しさは都市部の読者に大きな安心感を与えたのではないだろうか。

こうしたことから都市版の発行部数は、1年後の1936(昭和11)年9月号10万4000部、1937(昭和12)年7月号13万1000部、1938(昭和13)年12月号16万1000部とかなりの速度で増加していった。順調に推移したもう一つの理由として、市街地信用組合協会の側面的な協力と広島の高城購買、鹿児島の高城購買、長崎購買など地方色の濃厚な購買組合にはかなりの支持者があったことなどがあげられる。

今回は、順調に推移していた都市版が廃刊になる経緯をみていく。



都市版創刊号 岩田専太郎氏による表紙

<参考文献>

- 『家の光』(昭和10年7月号)
- 『家の光』都市版(昭和10年9月号)
- 『家の光六十年史』(昭和61年3月)